

## 滋賀県川田川原田遺跡出土犁の伝来事情とその後

河野 通明

## はじめに

生産技術の進展は社会を根底から変える動因となる。とりわけ動力源を人力に頼っていた前近代社会においては、畜力利用の犁や馬鍬は経済史研究に欠かせないテーマである。ところで文献史料には政治・外交記事に比べて技術情報はほとんど記録されないが、地域社会で使われつづけてきた在来農具には形態や呼称のなかに伝来事情や用途・性能に関する情報がいわば遺伝子として保存されており、比較研究によってその情報を引き出すことに成功すれば、文字記録に残らない古い時代や都から遠い地方や文字とは縁の薄い庶民レベルの生活情報、外交記録に残らないアジアとの関係の歴史の復原が可能となる。そう考えて在来農具の比較検討のために各地の博物館・資料館の収蔵庫の農具調査を始めて二〇数年が経過した。その成果として、加賀藩の一七世紀の長床犁導入政策<sup>(1)</sup>、薩摩藩が同じく一七世紀におこなった長床犁導入政策を復原することができた<sup>(2)</sup>。このいずれの政策も文献記録には残っておらず、藩主主導の政策で

あっても技術革新に関しては文字記録に残りにくいという特性があることが分かってきた。そして昨年これまでの研究を総括するなかから、大化改新政府の唐からの長床犁導入政策を復原した<sup>(3)</sup>。これも『日本書紀』には記録されておらず、民具調査の積み重ねの上に立つ物証からの経済史研究が有効なことを確信するにいたった。

また経済史研究にとって考古資料の利用も重要である。一般に発掘で新しい資料が出土するとまず既出例と比較されて「最古の資料」という文字が新聞誌面を飾るが、発掘資料は他の考古資料と比較するにとどまらず、その地の民具との比較を通して、その資料は地域経済にどういう影響を与えていたのかという経済史の観点からの分析が必要である。

以上の観点を踏まえて、本稿では滋賀県守山市川田川原田遺跡から出土した八世紀の犁の伝来事情とその後の地域社会に及ぼした影響の有無を検討しようとするものである。なお「川田川原田遺跡出土犁」という表記は長い文字列になるので、本稿では「川田川原田犁」と略して呼ぶことにする。

## 一、川田川原田犁の形態的特徴

川田川原田遺跡は琵琶湖東岸の南部、野洲川三角州の分岐点の西岸に位置する。遺跡は川田町の集落の西の都市計画道路の確認調査で発見され、奈良時代中期の溝から「野洲」墨書土器や「稲一束必令持今」と記された木簡のほか多数の木器に混じって犁が見つかった。犁は一九八七年に発掘され、翌年 PEG 処理がなされている<sup>(4)</sup>。

〔表〕は現時点でわたしの把握できている七～八世紀の出土犁の一覧である。これによれば、No 4 の下川津 B の年代が六世紀後葉～八世紀初頭と幅をもたせてあるが No 3 の下川津 A と同遺跡であることから七世紀のものと見なせば、七世紀の出土犁のほとんどが一本犁へらをもつ長床犁である。その一本犁へらグループに対して No 9 の川田川原田犁は形状においても犁床の長さにおいても別系統と考えられる存在であり、本稿で個別にとりあげ検討することとした。

〔図 1-a〕はその川田川原田犁で、比較のために一本犁へらをもつ梶原 A 犁を同じ縮尺で掲げた(図 1-b)。

川田川原田犁は犁床と犁柄は一本造りで、犁床長は四三・五 cm で長床犁にしては短く、中床犁と分類してもいい数値である。犁床と犁柄が一本造りの犁には、無床犁の犁身が下方に湾曲して先の部分が犁床化したグループがあり、わたしは「無床系有床犁」と名づけているが、この無床系有床犁では一般に犁身と犁床とは連続的にカーブするか、角度が付いて折れ曲がる場合でもその角度はかなりの鈍角である。それに対して川田川原田犁は犁床・犁柄の曲がり角

は後面で八〇度で、一本造りながら犁床・犁柄の区別は明確であり、無床系有床犁ではなく当初からの有床犁と考えるのが妥当と思われる。また無床系有床犁の場合は形は犁床に見えても走行時には接地しないものも多いが、川田川原田犁の犁床底面は先端から後端まで全面にわたって摩擦による光沢を帯びており(図 2-d)、実質的にも犁床として機能していたことが確認できる。

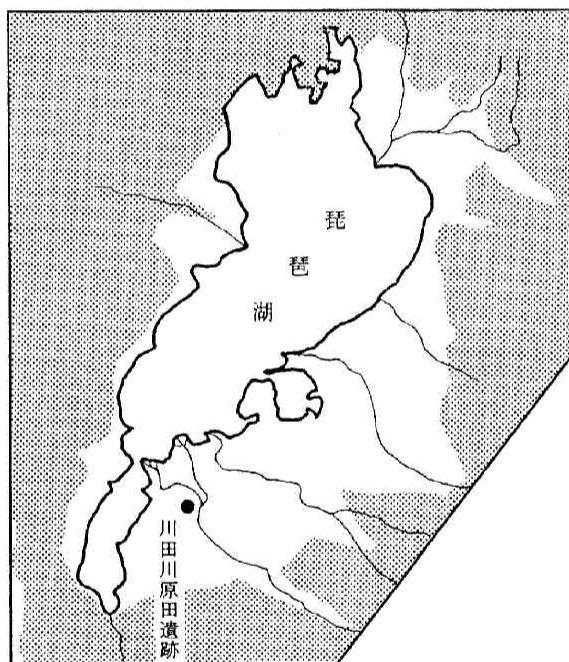
犁床の先端二〇 cm は犁先の受けとして幅広に加工しており、犁床後半との括れ部分は直角に加工されて犁頭は明確に区別されている。犁頭の先は風呂鍬の風呂部分の先と同じく先端・左右両辺とも削り細めているので(図 2-b, d)、U 字形鍬先のように内側に V 字溝を備えた鍛造犁先を嵌めたのであろう。この鍛造犁先は U 字形鍬先の技術を使いながら、先端は土を切りすすむために V 字形に尖らせたものであったと想定される。

犁頭の上面には左側を真横から二一度後退させた溝が刻まれており(図 2-a, b)、左反転の犁へらを装着したものと考えられる。犁柱の断面は前後に長い長方形であるが、中程の左前角は面をとって削られており(図 1-a)、犁へらの上部を受けたものと考えられる。面取りが緩やかな弧状に削られていることからすれば、曲面へらが装着されたように見えるが、下端がすでに偏角二一度で左を向いているので、平面へらであった可能性も残る。

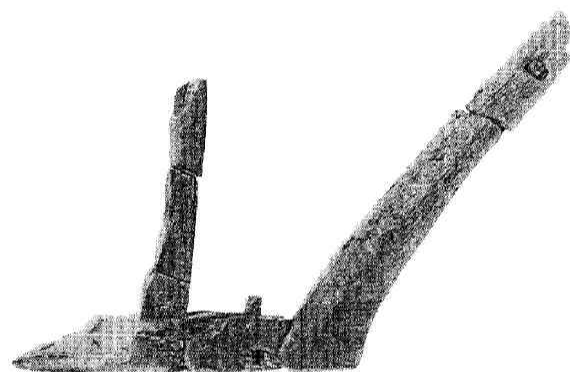
犁柄は前面で計って長さ五二・五 cm 分残存しており、中程には犁轅を差し込む柄穴が穿たれている。上端は段差をつけて後面を欠いた加工が施してあり(図 2-a)、犁柄を途中で接いでいたものと考

## 古代の出土犁(木部)一覧

No.	遺跡名	所在地	遺物の状況	時期	一木 犁へら	一木 犁柄	犁床長(cm)
1	梶原 A	兵庫 市島町	木部完形品	7世紀中葉	○		* 66.5
2	梶原 B	兵庫 市島町	木部ほぼ完形	7世紀中葉	○		* 70.0
3	下川津 A	香川 坂出市	犁床・犁へら	7世紀初頭～後葉	○		* 78.0
4	下川津 B	香川 坂出市	木製犁へら	6世紀後葉～8世紀初頭	○		欠
5	川除・藤ノ木	兵庫 三田市	木製犁へら	7世紀中葉	○		欠
6	安坂・城の堀	兵庫 中町	犁床	7世紀中葉～後葉	△	○	* 73.0
7	屋代	長野 更埴市	犁床・柄の形代	7世紀後半	○	○	模型 8.4
8	西河原森ノ内	滋賀 中主町	犁床	7世紀後葉	×		64.4
9	川田川原田	滋賀 守山市	犁床・犁柄	8世紀代	×	○	43.0
10	郡山城下町	広島 吉田町	犁柄	8世紀代	?	○	残存部 14.0
11	南広間地	東京 日野市	犁轅	8世紀第2四半期	○?		欠
					* のみの平均 71.9		



は一木犁へら犁 △は犁へら上部カット型



a No. 9 川田川原田遺跡出土犁  
(守山市立埋蔵文化財センター)

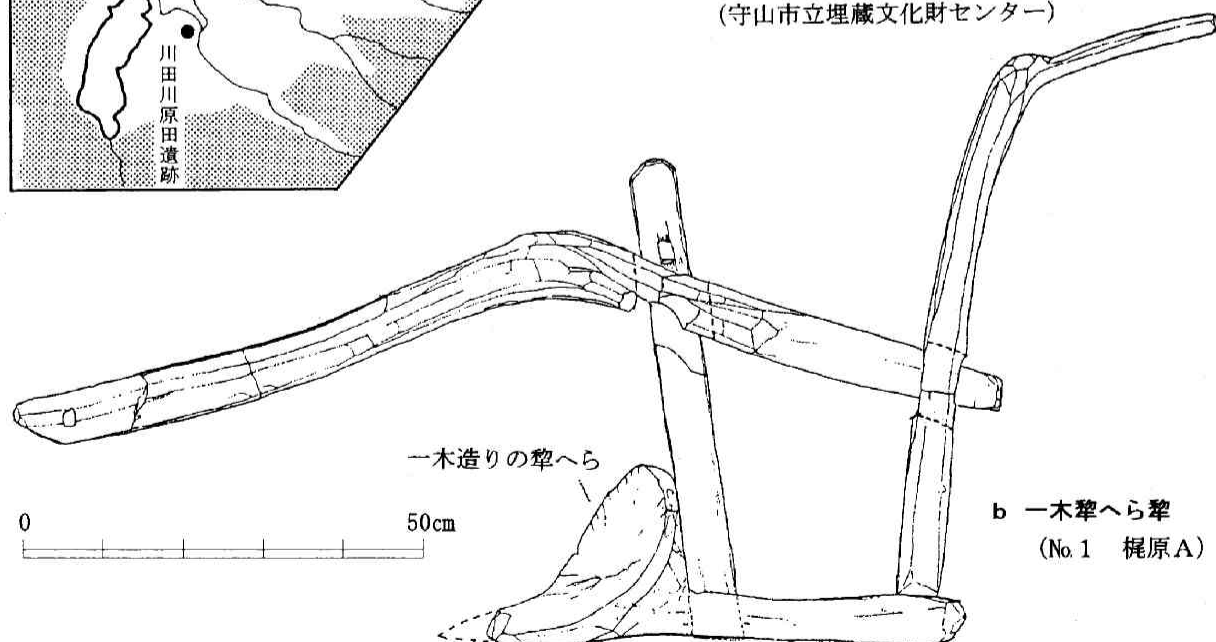


図1 川田川原田遺跡出土犁と一木犁へら犁

えられる。

ここで他の出土犁とは異なった川田川原田犁の形態的特徴を列挙しておく。

まず犁頭と犁床部分との括れ部分は直角に加工されているが(図 2-1a, d)、このような直角の括れは他の古代出土犁には見られない。また犁床上面に一辺二・一 cm、高さ二・七 cm の太柄が植えられており、犁床の左右側面には一・八 cm 角の太柄穴があげられていることである(図 2-1a)。犁床の太柄は他の古代出土犁には見られず、中国東北地方の犁<sup>リイジャン</sup>に特徴的に見られるものであるが、日本の民具の犁でも類例は知らない。加工技術の面では、犁先上面と犁へら受けの斜面の部分に幅二 cm 前後の半丸鑿の加工痕のようなものが数カ所残されており(図 2-1b)、この部分には穿孔する理由はみあたらず、鑿の方向も斜めであり目的をもった穿孔とは考えがたい。また犁床上面にも斜めの深い鑿跡がある。このような失敗とも思える加工痕からすれば専門職でない農民の自作であろうか。

このように民具の犁を見慣れたわたしにとっても、川田川原田犁は不可思議な存在であったが、発表翌年に刊行された北朝鮮平安北道出土犁が川田川原田犁と大変似ているのがその時以来気がかりであった。まずその点の検討から始めたい。

## 二、平安北道出土犁とその形態的特徴

一九八九年に朝鮮民主主義人民共和国で刊行された『朝鮮遺跡遺物図鑑 古朝鮮・扶余・辰国篇』に平安北道塩州郡故儀里の故儀里

遺跡で出土した紀元前八〜七世紀の「木製中耕用犁」の写真(図 3)が紹介されている。<sup>(5)</sup>

解説文によれば、この犁ピョンフチは塩州郡役所のある塩州邑から西南方面に四 km 離れた村付近の田畑の一・一・二 m 下層の泥炭層のなかから発見されたもので材質はブナ材という。犁床と犁柄は一木造りながら犁床の後端は直角に立ち上っていて、犁床・犁柄の区別の明確な有床犁となっている。サイズについては実測図が示されていないので写真から近似値を算出するほかはない。そこで写真のネームに長さ一四〇 cm とあるのを遺物の最大長つまり犁先〜把手頂点間を結んだ弦長と解して計算すれば、犁床長は八〇・七 cm 前後、把手の高さは八四・七 cm 前後となる。犁床はやや長いとも思えるが、犁柄の高さ八四・七 cm というのは、先端の卵形握りをつかんで走行させるにはちょうど適当な高さである。犁床先端の犁先を受ける部分の角度は二〇度前後だが、途中で五七度前後で立ち上がり、この表面に犁へらが取り付くのであろう。この面は左斜めを向いており、犁先の表面も左に向かつて傾斜していることと合わせて全体として左反転用に成形されている。犁頭部分は五〇 cm 前後と大きく、そこで直角に括れて犁床後半となる。

この平安北道出土犁の年代が紀元前八〜七世紀とされている点についてはにわかに信じがたいが、形態的には川田川原田犁とよく似ていることが注目される。そこで項を改めて、両出土犁の形態比較をおこなうこととした。

a 実測図

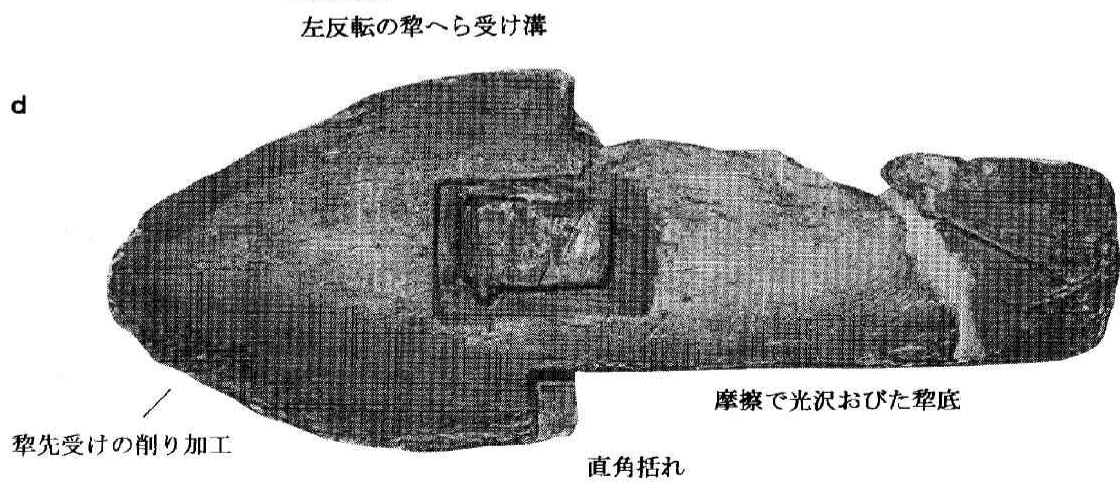
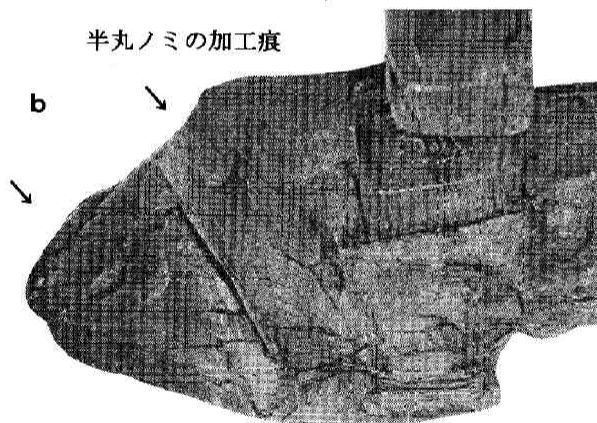
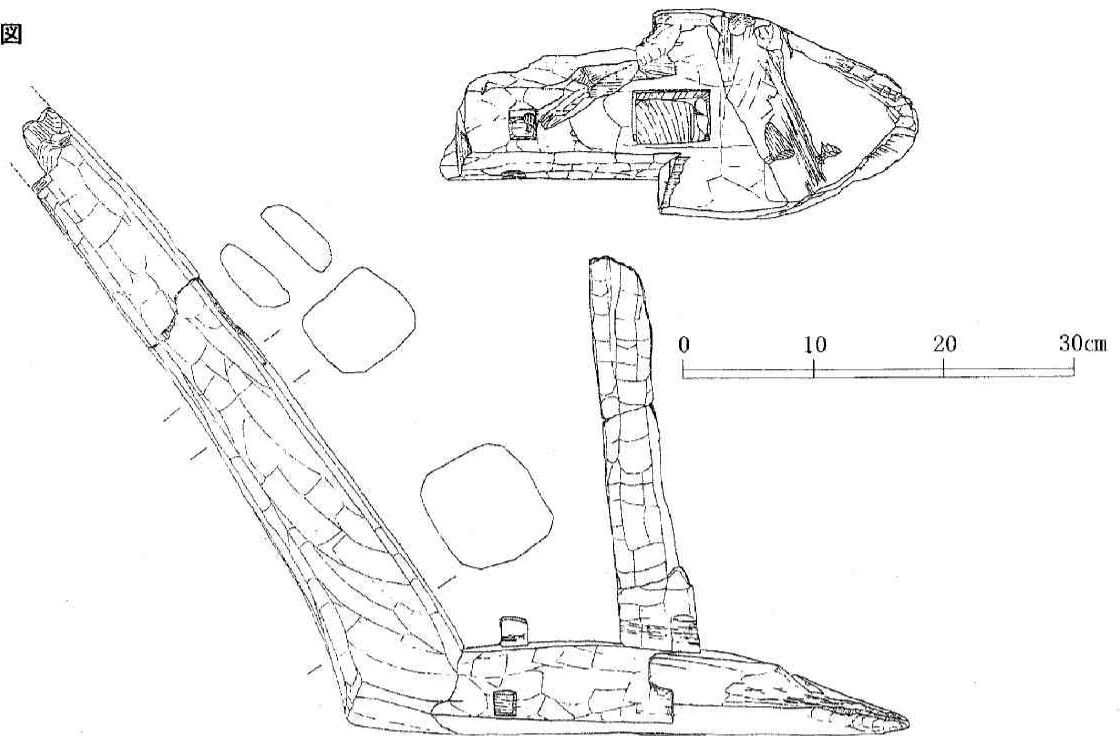


図2 川田川原田遺跡出土犁 (守山市立埋蔵文化財センター)



### 三、川田川原田犁と平安北道出土犁の類似点

〔図4〕の a は川田川原田犁、b は平安北道出土犁で、両者の形態比較が目的なので、縮尺は無視して図がほぼ同大になるよう調整した。また平安北道出土犁は側面からの写真しかないので、比較の便宜のため写真から想定される平面形を模式図として示した。

さて両資料の類似点を列挙すれば、①犁床と犁柄は一本造りながら明確に区別した形に加工されており、川田川原田犁で確認したように平安北道出土犁も犁床は地面を擦って走行したと考えられる。

②上から見れば犁頭と犁床の境は直角に括れている。③犁頭部分は左反転用の平面へらを受けるように成形されている。④犁床の左右側面には二 cm 角程度の太柄穴があげられており、川田川原田犁の犁床上面に見られるような太柄が植えられていたのであろう。⑤平安北道出土犁には犁へら受け部分に半丸鑿加工が見られるが、川田川原田犁には犁頭の数カ所に半丸鑿跡が残されており、同系の工具が使われたと考えられる。

ここまでの類似は加工主体が同じ民族に属すると考えたくなるほどの一致であり、川田川原田犁の伝来事情を考える上で興味深い類似といえよう。

### 四、朝鮮半島のフチ、中国東北地方の犁丈との比較

川田川原田犁の伝来の故地を考える上で、検討すべき資料として朝鮮半島のフチと中国東北地方の犁丈がある。

#### a フチ

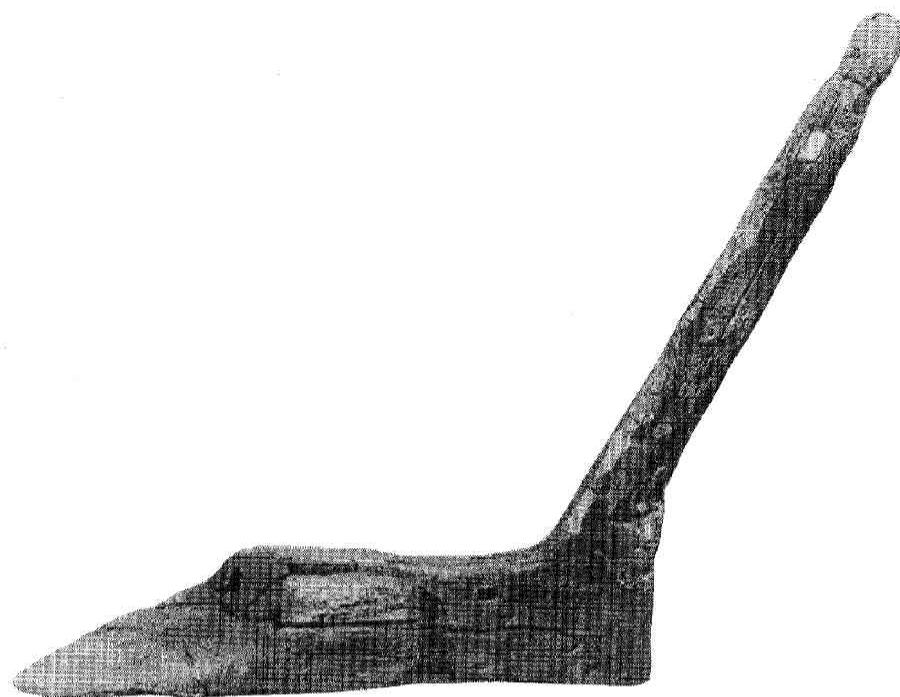
平安北道出土犁はピョンフチと解説されていたが、フチと称する犁が朝鮮総督府勸業模範農場編の『朝鮮ノ在来農具』（一九二五）に掲載されている。<sup>6)</sup>〔図5-a〕はその「ふち」で、「本器ハ乾畚ニ於ケル特種ノ農具ニシテ一種ノ有底犁ナリ」とあり、「よんじやんにテ耕起セル土地ニ播キ條ヲ作ル場合、又ハ中耕除草ノ際、牛又ハ驢ニ曳セテ使用セラル。播條ノミヲ耕起スル場合ハ最初ヨリ本器ヲ用ヒテ播種スルモノトス」という。

このフチも犁床と犁柄は一本造りで、対地角五三度ほどで折れ曲がって犁床は明確に区別されており、犁床長は三三 cm。図中から計測した把手の地上高が七九 cm 前後で人が握るのに適度の高さであることからすれば、犁床は実際に地面を擦って走行していたものと思われる。犁轅は犁柱の前で二股に分かれた双轅犁で、犁柱から前方の長さ二四八 cm への字形首木につながれた一頭引き犁である。

このフチは犁床と犁柄の区別の明確な一本造りという点で、川田川原田犁や平安北道出土犁と共通し、犁床の長さでは川田川原田犁に近く平安北道出土犁からは遠い。またこのフチの犁床には太柄や太柄穴は見られないという点では、川田川原田犁からも平安北道出土犁からも遠い。太柄をもつものは次項の犁丈である。

#### b 犁丈

中国東北地方（旧満洲地区）<sup>7)</sup>では犁丈とよぶ長床犁が使われてき



나무후치(길이 140cm) 木製中耕用犁 Wooden ridge-plough

図3 平安北道出土犁 (『朝鮮遺跡遺物図鑑』)

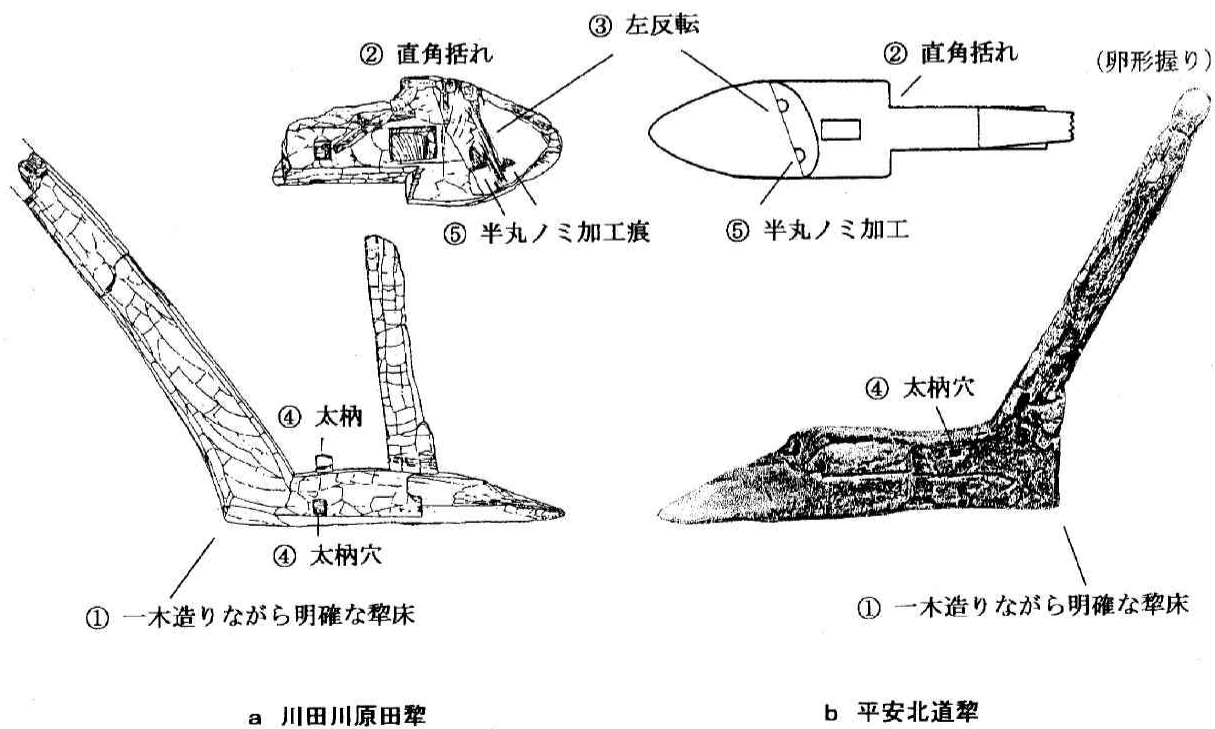


図4 川田川原田犁と平安北道犁の類似点

た。〔図 5-1b〕は満州国実業部臨時産業調査局編の『産調資料四五一六 耕種概要篇（北満農具之部）』（一九三七）に掲載された犁丈で、犁床の上面と側面には別簀児ビエツマスルと呼ばれた太柄があり、犁へらに相当する分板・平板などを固定するための紐掛けとして使われていたようである。川田川原田犁と平安北道出土犁に見られた太柄・太柄穴は、この別簀児と考えられる。

以上見たように、犁床と犁柄が一本造りながら明確に区別されている点や犁床長はフチに近く、犁床に太柄をもつ点は犁丈と共通する。フチは朝鮮半島では北部の畑作地で使われるものであることを考慮すれば、川田川原田犁は朝鮮半島北部的な犁といえよう。

## 五、川田川原田犁の系譜の検討

以上の考察を踏まえて川田川原田犁の系譜について考察しておく。

冒頭に「表」で見たように、川田川原田犁は七世紀の一木犁へら犁とは別系統と見られ、その形質を部分要素としても備えていないことからすれば、一木犁へら犁との混血型でもない。一木犁へら犁はすでに別稿で論じたように中国唐代犁の日本的改変と考えられることからすれば、川田川原田犁は中国系ではないということになる。また川田川原田犁が一木造りながら犁床と犁柄の区別が明確なことからすれば、一般的な朝鮮系無床犁の系譜にはつながらない。

そしてすでに見たように、川田川原田犁は平安北道出土犁や朝鮮半島北部のフチ、中国東北地方の犁丈との親近性を示すことからす

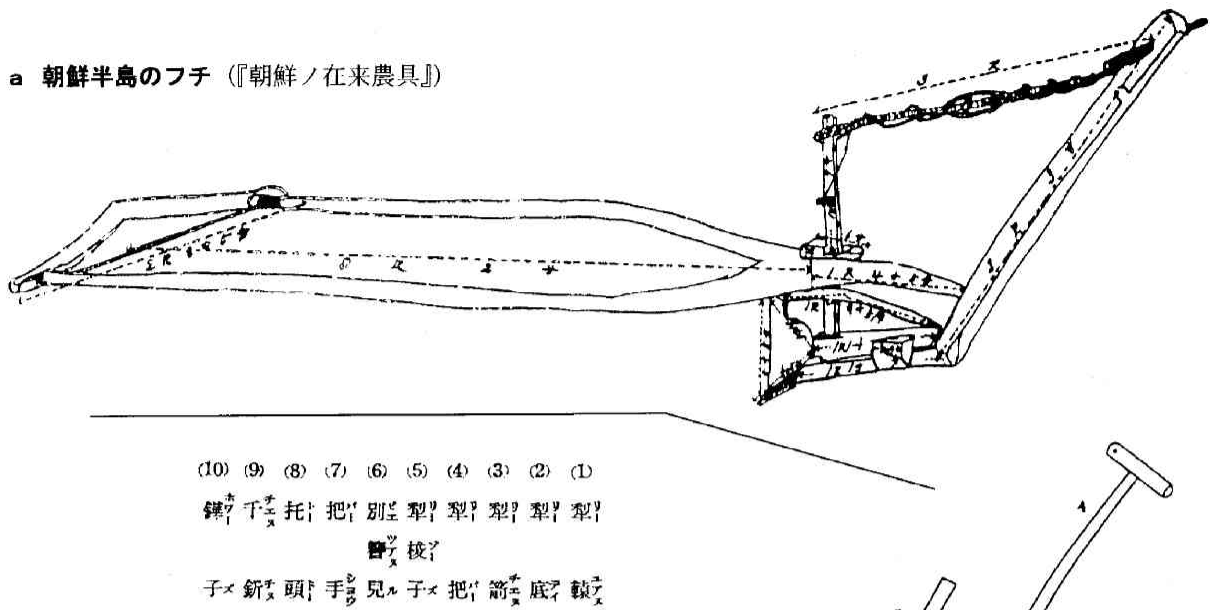
れば、朝鮮半島北部からの渡来人によって持ち込まれた可能性が高いことになり、高句麗からの渡来人の持ち込みという可能性が高くなるが、この想定は周辺の事柄と矛盾しないであろうか。

別稿で検討したように、大化改新政府は遣唐使が持ち帰った長床犁に日本の事情にあった改良を加えて政府推奨モデルをつくり、それを各郡に下ろして普及をはかったものと推定される。<sup>(8)</sup>七世紀に各地で出土する一木犁へら犁に形態上もサイズにおいても規格性が見られるのは、政府モデルにもとづく複製だからであろう。この長床犁導入政策の出される以前に渡来した朝鮮人村では朝鮮系無床犁を使っていたところに政府モデルが行政の力を背景に使用が推奨されるので、朝鮮系無床犁と政府モデルとの混血がおこり雑種が生まれる。それに対して導入政策以降に渡来した朝鮮人村では導入政策の影響を受けないので、朝鮮系無床犁が純粋な形で残る。この後者の導入政策以降の渡来人とは渡来人最後の波、つまり百濟滅亡・高句麗滅亡にともなう亡命者・難民に相当する。

さて川田川原田犁は一木犁へら犁の影響をまったく受けていないことからすれば、百濟・高句麗難民による持ち込みと推定されるが、さきの川田川原田犁が朝鮮半島北部の犁との親近性を示すという考察と重ねれば、高句麗難民に絞り込むことができよう。つまり川田川原田犁は六六八年九月の高句麗滅亡にともなう難民によって持ち込まれたものであり、川田川原田地区には彼らの集落があった可能性が高いということになる。そうならば他の考古遺物に痕跡があるかどうかの検討も必要となるが、この点は後日にゆずるとし



a 朝鮮半島のフチ (『朝鮮ノ在来農具』)



b 中国東北地方の犁丈  
(『復刻 満州の在来農具』)

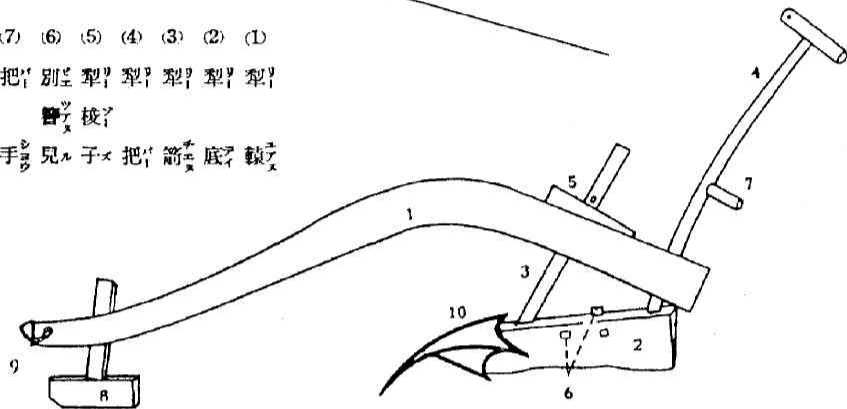
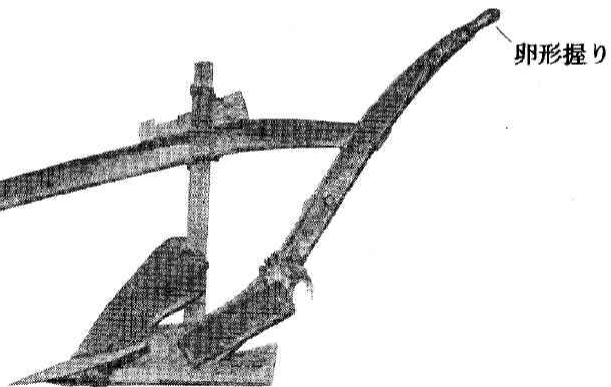


図5 朝鮮半島のフチと中国東北地方の犁丈

a 改良秋耕犁 (中主町教育委員会)



b 中主町の在来犁 (中主町教育委員会)

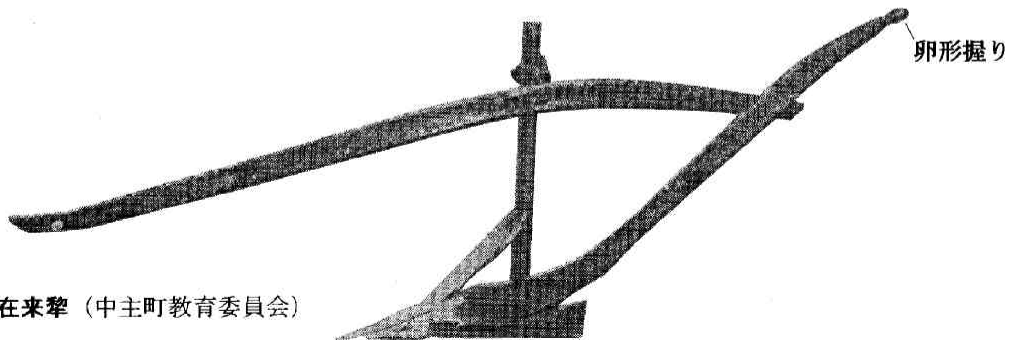


図6 中主町の犁にみられる卵形握り

て、ここでは民具の在来犁と出土犁の比較研究からは以上のような結論が導かれるということを提起しておきたい。

さて川田川原田犁の年代は八世紀代で、渡来時期から最低三〇年は経過している。持ち込んだ犁を使い続けて壊れたので八世紀に捨てた可能性もあれば、途中で一度更新されている可能性も考えられる。前者の場合は製作地は朝鮮半島北部であり、後者の場合は近江国野洲郡の守山地区となる。さきに犁頭の先は風呂鍬の風呂部分の先と同じく先端・左右両辺とも削り細めているので、U字形鍬先のように内側にV字溝を備えた鍛造犁先を嵌めたのであろうと推定したが、これは鉄材の不足がちの日本の対応であり、朝鮮半島でなら鍛造犁先を使ったであろう。ただ鍛造犁先は消耗品で割れることもなるので、のちに本部先端と左右縁辺部を削り細めて、鍛造犁先を装着できるように改造した可能性も残る。

この川田川原田犁の製作地が朝鮮半島北部なのか近江国なのかの判別は、樹種鑑定を実施するなら可能であろう。鑑定の結果、材がブナのような冷帯林の植物であれば朝鮮半島北部での製作の可能性が高く、カシヤクスノキのような暖帯林の植物であれば近江での製作と断定できよう。樹種鑑定はぜひ実施してほしいものである。

## 六、川田川原田犁の犁轆の復原

川田川原田犁は犁轆の復原について難しい問題がある。犁柄には犁轆後端を差し込む柄穴があげられているがその角度が急なのである。犁柄の柄穴の仰角は下面で四三度、上面は内部で角度が変わっ

ていて後面寄りでは四四度と下面とほぼ平行だが、前面寄りでは六五度と大変な急角度となっている。角度の緩い下面に合わせて直棒犁轆を差し込んだ場合、犁柱との交点は犁柱前面と犁轆下面との交点で地上高五〇cm、あり得ない数値ではないが、犁床長四三cmの犁体に対してはアンバランスな高さである。

こうした場合は犁轆自身を下方に曲がる曲轆としなければならないが、曲轆はもともと中国の漢族社会で二頭引き犁を一頭引き化する過程で生まれたもので、朝鮮半島では直轆犁が主流であったことからすれば、中国系ではない川田川原田犁の犁体とはあまり馴染まない。ところで先に見た中国東北地方の犁丈もまた典型的な曲轆犁であり、川田川原田犁が犁丈と共通する要素をもつことからすれば、曲轆犁の可能性もまた否定できない。

ただ犁轆の仰角は柄穴の角度にぴたり合わせて考える必要はない。柄穴の上下幅は前面で一・七cm、後面で一〇・三cmあり、犁轆後端の上下幅は、一般に六・七cm程度なので、柄穴に十分な遊びがあったことになる。中国系長床犁ではここに後ろから何本かの楔を打ち込み、その楔を上下に打ち変えることで犁轆先端を上下させ、耕深調節装置とする。この方式は日本の在来長床犁にも継承されている。それに対して朝鮮系無床犁では耕深調節はもっぱら犁柱と犁轆の交点を上下することでおこなわれ、この場合は犁轆後端は硬く固定する必要はなく、多少の遊びがあるままでも抜けなければかまわない。ただしその場合は犁体の形を保持するため、犁柱の頂部と犁柄の間に縄を何重にも掛けて中央部分を棒でねじって縄締めする

必要があり、この縄締めは朝鮮半島犁によく見受けられる。

日本に伝来した犁は基本的には一頭引き犁と考えられ、川田川原田犁も一頭引き犁という前提で分析しているのだが、一頭引き犁の犁轅には先のフチで見たような二股材を使った双轅犁がまれに見られる。双轅犁は二頭引き犁を一頭引き犁に改良する過程で生まれるもので、中国でも嘉峪関魏晋墓壁画にも見られるが、耕犁<sup>9</sup>尻枷の開発によって駆逐されたようで、在来犁のなかには継承されていないようである。<sup>(9)</sup>朝鮮半島では尻枷の開発までは行き着かず、左右の引綱間に挟んで幅を確保する幅もたせ棒<sup>10</sup>半尻枷にとどまった事情もあってか、『朝鮮ノ在来農具』にも何例かの双轅犁が見られる。そして川田川原田犁が朝鮮半島北部の犁に由来するとなれば、双轅犁であった可能性も浮上する。

川田川原田犁の犁柄柄穴のサイズと角度からして、犁轅の角度を低く取ろうとすると何度まで可能であるかを図上から計算すると、犁轅後端の上下幅を6cmとした場合は最低仰角一三度、7cmとした場合は最低一八度でずいぶん緩やかになる。川田川原田犁の犁轅復原の選択肢として、双轅犁の可能性も含めておく必要がある。

このように川田川原田犁の犁轅についてはいくつかの可能性があり、現時点でのわたしの力量では一つに絞り込めないというのが正直なところである。

## 七、川田川原田犁の二〇世紀への継承の検討

川田川原田犁はその後の地域社会に受容されて二〇世紀の在来犁

まで継承されたのか、それとも生物に譬えるなら途中で絶滅して民具にまでは継承されなかったのか、この点を確認することが地域経済史の観点からは重要なポイントといえよう。

守山市には民俗資料館など民具を収集する施設はない。そこで教育委員会の紹介で河西小学校と吉身小学校それに農家の林儀一氏宅を訪ねたが、この地域独特の「横江式秋耕犁」系の改良犁（本稿では「改良秋耕犁」と略称）に席巻されて在来犁は残っていないかった。南西隣りの草津市も同様であったが、北東隣りの中主町文化財保管庫と南東隣りの栗東歴史民俗博物館では在来犁から改良秋耕犁への改良過程がつかめる資料が収集されていたのでそれを紹介することにした。なお東隣りの野洲町では在来型の長床犁と無床犁が収集されているが、川田川原田犁とも改良秋耕犁とも共通点は見いだせず、この地域は別系統と考えられる。

〔図6-a〕は中主町の改良秋耕犁で、同形犁のアルミプレートには「秋耕用滋賀縣特殊犁 本家 奥野犁製作所 野洲郡守山町字横江」とあり、形態的には犁先から犁柄まで一木造りの湾曲した犁身の下面に楔形の犁床を補って有床犁としたもので、鉄先の付いた状態で犁床長六七cm、全長は一九〇cmである。〔図6-b〕は同じく中主町の在来犁で、これも犁身の下面に楔形の犁床を補って有床犁としたもので、犁床長六五cm、全長は二三〇・三cmと長い。同形犁は栗東市でも見られる。

さてこの両者を比べると、aの改良秋耕犁はbタイプの在来犁の前後寸を縮めたものであることが読み取れよう。近代短床犁が出現

したとき、在来犁の安定性を保持しつつ近代短床犁の軽便性を取り入れ全長を縮めた改良がうけて近隣に広がり、お膝元の守山市域では在来犁を駆逐してしまったものと考えられる。aの改良秋耕犁が守山起源であったことからすれば、姿を消した守山の在来犁もbタイプであったと考えられるが、ここからさらに古いタイプを復元してみよう。

bタイプの在来犁は楔形材を犁身下面に取り付けて有床犁としており、これが外付け材であることからすれば、これを取り去った姿がより古い段階の犁型を示していると考えられる。そこで楔形材を取り去れば、緩やかにカーブした犁身をもつ長体無床犁となる。これが朝鮮半島から伝来した当初の姿であろう。それは一木造りながら明確な犁床を備えた川田川原田犁とは似ても似つかぬものであり、この長体無床犁が守山市・中主町・栗東市に広がっていることからすれば、このタイプを持ち込んだ朝鮮系渡来人が地域では多数派を占めていたことが想定される。そのなかにおいて川田川原田犁を持ち込んだ高句麗難民家族は少数派であり、故郷の生活スタイルを維持し難かったのか、その犁もいつしか淘汰されて二〇世紀までは継承されなかったものと考えられる。

ただ一点、興味深いことが指摘できる。それはaの改良秋耕犁もbの在来犁も犁柄の頂部は卵形に削り出された卵形握りとなっており、この卵形握りは民具の在来犁では一般的ではない。丸形の握りは長崎県の五島列島の「石犁」と呼ばれる短体無床犁に見られ、滋賀県内では北部の余呉町の短体無床犁にも見られるが、管見ではそ

れくらいである。ところが卵形握りは〔図3〕の平安北道出土犁にも明確に見られるのである。となると川田川原田犁の犁柄頂部の形状が知りたいところであるが、欠けた部分であるから知るよしもない。ただし川田川原田犁にも卵形握りがあったとするなら、

平安北道出土犁(紀元前八世紀・朝鮮半島北部)

川田川原田犁(八世紀・近江野洲郡)

野洲郡の在来犁(二〇世紀)

という継承関係があったとの想定も可能となる。もっともすでに見たように川田川原田犁の犁体は継承されていないので、川田川原田犁の卵形握りが滑り止めに有効との評判で別系統の犁にも伝染したことになる。これは推測の積み重ねに過ぎないが、伝来技術と地域社会との関係を考える際の一つの可能性として提示しておきたい。

おわりに

以上、川田川原田犁について、平安北道出土犁や朝鮮半島のフチ、中国東北地方の犁丈との関係で伝来の故郷をさぐり、野洲郡の在来犁との関係で八世紀犁のその後の地域社会との継承関係を考察してみた。その結果、川田川原田犁は朝鮮半島北部系で高句麗難民によって持ち込まれた可能性が高いこと、彼らは地域では少数派であり、その後の歴史の展開のなかで川田川原田犁は継承されずに消滅したと考えられること、川田川原田犁には卵形握りが付いていた

可能性があり、その便利さから別系統の在来犁に伝染し、守山・中主・栗東地域の在来犁に継承され、改良秋耕犁にまで及んだ可能性も考えられるという結論を得た。

社会の近代化は、他方では地域の生活様式や文化の画一化、均質化の過程であり、時代とともに地域の個性は失われてきた。そしていまやグローバル化の名の下に、地球規模での画一化、均質化が行い、我々が依って立つべき足場は何かが不明確になっている。ここでもう一度地域の個性とは何かを振り返ることが必要であろう。

ここで時計を逆に回すなら、時代が遡ればさかのぼるほど地域の個性は強くなり、この単一民族的に見える日本社会も千数百年さかのぼれば渡来人と共生する多民族社会である。その実態は文献史料では霞の彼方で探りようもないが、地域社会で先祖代々伝統的に継承されてきた民具には、それを持ち込んだ人々の民族系譜や地域社会と取り結んだ諸関係が遺伝子として継承されているはずである。したがって民具から過去の遺伝情報を引き出し、考古資料も民具との関連で分析するという方法で、前近代の経済構造を地域ごとに復原していく作業が必要となる。本稿はそうした物証からの経済史研究の一つの試みである。

#### 〔付記〕

川田川原田遺跡出土犁については守山市立埋蔵文化財センターの畑本政美・大岡由記子氏のお世話になった。また工楽善通氏（当時奈良国立文化財研究所）には早々に川田川原田犁や平安北道出土犁の情報・資料の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。

#### 〔注〕

- (1) 河野通明「大野湊神社奉納雛形農具と加賀の馬耕」〔商経論叢〕第三巻一、神奈川大学経済学会、一九九五年。
- (2) 河野通明「成形成図説」犁図の再検討―近世前期薩摩藩における長床犁導入政策の復原―〔商経論叢〕第三七巻二、神奈川大学経済学会、二〇〇一年。
- (3) 河野通明「鹿兒島県の在来犁」民具調査からの薩摩藩犁導入政策の検証―〔商経論叢〕第三八巻二、神奈川大学経済学会、二〇〇二年。
- (4) 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」〔ヒストリア〕一八八号、大阪歴史学会、二〇〇四年。
- (5) 〔乙貞〕第三五号（守山市立埋蔵文化財センター、一九八七年一月）、「滋賀埋文ニュース」一〇二号（滋賀県埋蔵文化財センター、一九八八年九月三〇日）、「保存処理ニュース」No三五〔B〕（滋賀県埋蔵文化財センター、一九八八年一〇月三十一日）。
- (6) 〔朝鮮遺跡遺物図鑑 古朝鮮・扶余・辰国篇〕〔朝鮮遺跡遺物図鑑〕編纂委員会、朝鮮民主主義人民共和国、一九八九年二月、三九頁。本文はハングル表記である。その訳出には郭鐘喆・金美善氏のお世話になった。
- (7) 〔朝鮮ノ在来農具〕〔朝鮮總督府勸業模範場、一九二五年、復刻版、慶友社、一九九一年〕、三九頁。
- (8) 〔産調資料四五―一六 耕種概要篇（北満農具之部）〕（一九三七年）復刻 満州の在来農具、慶友社、一九九三年、一三頁。
- (9) 注(3) 河野「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」、二〇五頁。
- (10) 河野通明「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」〔商経論叢〕第三二巻一、神奈川大学経済学会、一九九六年。